



笑

A氏はしがない研究所の所員だった。歳は大体六十。べつに髪の毛を生やす研究をしにきたわけではない。彼の専門は「空間」であった。しかし、その研究対象ははっきりと決まっていない。ふっと浮かんだ疑問をその日の内に解決してしまうような仕事ぶりだった。

その日、彼は珍しく徹夜をしてまで研究に没頭していた。同僚が面白がって声をかけてみたが、返事をしないので帰って行った。その直後、A氏が

「出来たぞ！」

と叫んだため、さっき帰ろうとした男が驚いて戻ってきた。

「おい、何が出来たんだ？」

「これだ。見てくれ」

A氏が指差した先には、精巧に作られた世界の平面模型が置いてあった。それを見た男は顔をしかめた。

「なんだ、お前。仕事サボってプラモなんか作っていたのか？」

男が模型を触ろうとしたのを、A氏が慌てて制した。

「駄目だ、触っちゃ！この模型は今、リアルタイムで現実通りに動いているんだ」

啞然としている男を気にせず、A氏は続けた。

「今お前が模型に触れると、そこに隕石が落ちたみたいになるぞ」

ようやく言っていることを飲み込んだ男が聞いた。

「リアルタイムで？現実通りに？」

「本当さ。ほら見ろ。所長がバーで女をくどいていやがる」

A氏は、模型に接続されている液晶画面を指差した。そこには、いかにも水商売らしい女を研究所の所長がくどいているのが映っていた。

「本当だ。いやらしい」

「これは、過去の出来事も史実通りに見ることが出来るのさ。未来はまだ研究が必要だけど」

二人はしばらく過去の様子を眺めた。その後、A氏が口を開いた。

「今コイツを殺したら、あの殺人事件はなくなるよな」

A氏は、時効が切れた殺人事件の犯人をぼおっと眺めていた。

「ああ」

横にいた男は頷いた。

「まさか、殺すのか？」

「ああ。この針で刺せば――」

言い終わる前に、A氏はその針を殺人犯がいるところに刺した。液晶画面には、頭を貫かれ死んだ殺人犯の姿が映っていた。

「何故針が映らないんだ」

「もし映っているとしたら、上空に私たちの顔が浮かんでいるはずだろう？」

なんとか理解した男は、しばらくして

「もう一人くらい...」

と呟いた。そして画面に映した銀行強盗を針でさっきと同じ様に刺した。そして、その横のA氏もまたひき逃げ犯を車ごと刺した。そして、その横にいた男も同じ様に――。

「おい、こんなところにミニチュアを使って過去の間を殺している人がいるぞ」

やがてそこに同僚の警察官がやって来た。

「本当だな。ミニチュアを使って、過去の間を殺していやがる」

「どうする、排除するか？」

「決まっているだろう。やれ」

その瞬間、警官は目の前のミニチュアに向けて特殊なレーザーポインタを撃ち、A氏を殺した。

しかし、どうなるだろう。ミニチュアの発明者が、それを世に公開する前に殺されてしまったら。そしたらそれは、未来の警察でも使われなくなってしまうし、そしたら警察はA氏を殺せない。そしたら発明者は生きることになるし....。

男は無職であった。彼は俳優以外の仕事には就きたくないという一途な男であった。間もなく就活にしては遅くなるという時期にも関わらず、彼は芸能事務所のオーディションに落ちつづけていた。

そんな或日、彼は友人を家に招いた。友人は有名なアーティストのマネージャーをやっていて、男に芸能界について教えていた。そして、男はこんな話を切り出した。

「芸能人ってさ、占いとかお祈りとかに頼ることとあってあるの？」

その質問に友人は首を傾げた。

「君って、占い事とか嫌いだよな？」

「そうなんだけどさ、そんなことで俳優になれるんなら試してみてもいいかなって」

ふうん、と言って顎をさすった後、友人は言った。

「『一生に一度』っていう名前のお祈りがあるんだけどさ」

「ほお」

男は身を乗り出した。

「名前の通り、一生に一度だけ願を叶えてくれるんだ。それまでには手順があってね。『ヴルゴーニユ』というワインをグラス一杯に注いで、箸で一回叩くんだ。零れないようにやさしくね」

男は瞬き一つせずに友人の話を聞いていた。もし本気で知ろうとしていないのなら話すのをやめようと思っていたが、余りにも真剣な眼差しだったので友人は話を続けた。

「そうしたらこう唱えるんだ。『出でよ、神の化身』って」

「そしたら出てくるのかい？」

「さあ。その人の気持ち次第さ。仮に出てきたら、後はそいつが案内してくれるさ」

友人はそれを話し終わると、家に帰っていった。彼が帰ってすぐに、男はインターネット通販でワインを購入した。数日後ワインが届くと男はグラスと箸を用意して、友人が言っていた通りに手順を進めた。

「出でよ、神の化身」

言い終えぬ内に、男は何者かに肩を叩かれた。驚いて振り向くと、そこには全身黒ずくめの男が立っていた。

『最近は何も私を呼んでくれないから、貴方が用意をしてくれるのをずっと待ってましたよ。』

「あなたは、どんな願でも叶えてくれるそうですね？」

『ええ、一生に一度だけ。ただ――』

「ただ？」

『私は悪魔よりもタチが悪いですからね。なんせ、セコいし、願い事は一つだけですし――』

「魂は取らないんだろ？」

『ええ、まあ。』

「ならいいよ。用件を言ってもいいかい？」

『どうぞ。』

「ずうっと売れつづける俳優にしてくれ。後は何も要らない」

『承知しました。では、明日にはその願が叶っていることでしょう』

シーユー、と言った後、化身は煙のように消えた。

「よし、これで俺も...！」

男が言いかけた時、家の電話が鳴った。

「もしもし」

『そちら、Kさんのお宅ですか』

「ええ」

『たった今、お母様が事故で亡くなりました』

男は耳を疑った。電話を切った後、頭の中を整理する間もなく男は烈しい揺れに襲われた。テレビが緊急地震速報を伝えていた。男は家を飛び出した。しかし、背後から崩れてきた男のマンションが――。

或カップルが肝試しをしていた。

「ねえ、怖いよお」

「大丈夫だって...うわァ！」

二人の前には、一人の幽霊が立っていた。

『グワアアアアァ！』

カップルは一目散に逃げ出していった。

『はい、カット！』

『お疲れ様で～す！』

『いやあ、今日も冴えてますね！』

『なあに、こんなもの、朝飯前ですよ』

カップルを脅かした幽霊は得意げに言うと、『生者をドッキリ！』という番組名が書かれた服を着た幽霊カメラマンに言った。

『あそこに立っているの、誰かな？』

『あ、あの人、あなたの恩人とか言っていましたよ』

仕掛人の幽霊が指差した霊は、ふっと笑うとその場を去っていった。

『あんなやつに、恩を受けた覚えはないなあ』

生前の記憶までも願で失ってしまったK氏は、しばらく化身を眺めた後、

『まあ、そうなのかもしれないな』

と呟いた。

美しきマンションの百階での生態

百階に住んでいるN氏は、見飽きた景色に尋ねた。

「なーんでまた、こんなことになっちゃったのかね？」

百階、といっても、一階に等しかった。九十九階まで海水で一杯だったからだ。N氏の素朴(?)で簡単な疑問に答えよう。南極の氷が全部溶けたのだ。それが全部溶ける前に、異常気象で一ヶ月も雨が降り続き、更に地震で津波がきた結果、九十九階以下の階に住んでいた人はみんな流されてしまったのだ。波は引いたものの、結局は南極の氷が全部溶けて九十九階まで沈んでいるというわけ。

それから十年近く経ち、元から老けていた元富豪のN氏はすっかりよぼよぼになってここにいる。隣人はいない。百階は全て彼の部屋。津波の時も、人の家に大勢の人を上げてしまったら、どさくさに紛れて何を盗まれるか分からなかった。だから、エレベーターを締め切って皆殺しにした。残念。話し相手に一人ぐらい美人を上げておいてよかったかも、とN氏は今になって思うが、覆水盆に返らずなのだ。

住人はN氏と蚊だけ。水があるから育ち放題。そんな環境だからN氏は蚊に刺されまくりである。でもよかった。今からそのわけを説明しよう。

十二時。昼食の時間。N氏は蚊を虐殺し始めた。

『パチン!』

『パチン!!』

『パチン!!!』

やがて、手に恐ろしいほどへばり付いた蚊をペリペリ剥がし始めたN氏。それを丸めて団子にし、釣り針に着けて窓から投げる。あ、N氏の趣味は釣りだったということを説明してなかったか。では、今のがそれということで。

やがて、山のような数年前の人の死骸で肥え放題のデブ魚が釣れた。それをN氏が頬張る。それで出来た血を、蚊が吸う。いい循環ではないか。昔の受験生に

「これが食物連鎖だ！」

と叫びたくなったのはN氏だけか。蚊がいない冬は、魚の食べ残しで釣る。

やがてN氏に死が訪れた。蚊はどうか。死後間もなくは吸えた血も、やがて枯渴した。死んだ。生物全滅だ、と思いきや、あ、まだ海に魚がいた。最後に笑ったのは、人間に負けていた魚か。見ろ、あの勝ち誇ったようなしたり顔を。え、いや、ホントに笑ってるんだって！いやあ、遂に魚がDHAの頭良くなる作用を発揮できる時がきたね～。よかったねえ～！

洸

<http://p.booklog.jp/book/75037>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75037>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75037>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ